

## ニュース みやぎ生協組合員や 宮城県漁協と交流 大阪いずみ市民生協

大阪いずみ市民生協は、震災後、バスで被災地を訪れ、炊き出しや漁港での土のうづくりなどのボランティア活動を行なっています。昨年からは、より大阪らしい企画をと、「たこ焼き交流ボランティア」を福島県や宮城県で始めました。

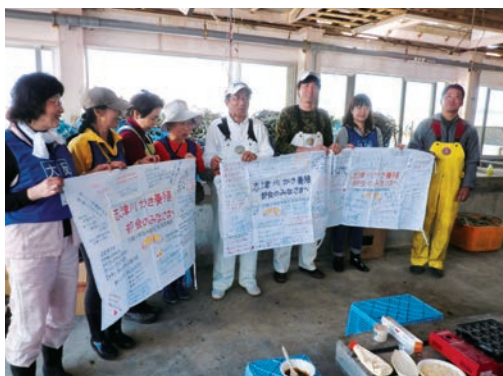
5月17日、18日には、組合員19人と職員2人が「ボランティアバス」で宮城県の石巻市、女川町、南三陸町を訪問しました。17日は、みやぎ生協のメンバー（組合員）と「たこ焼き交流」を行いました。この企画は、大阪いずみ市民生協が、「組合員同士の交流会を開きたい」とみやぎ生協に依頼し



焼き方を教えてもらったみやぎ生協の組合員。「家でまたこ焼き作っています」。

実現しました。「みやぎ生協のこころ委員さんも、さまざまな支援活動などで疲れていると伺い、ホッとできる機会をつくろうと思って企画しました」と大阪いずみ市民生協・組合員活動部部长（現、大阪府生協連・常勤理事）の中村夏美さんは話します。

また、18日は、南三陸町志津川を訪問。袖浜地区で、メカブ削ぎ作業の手伝いを行ないました。宮城県漁協志津川支所課長の菅原茂さんは、「カキ処理場もでき、2年でここまでこられるとは予想してませんでした。ご支援くださった皆さんのおかげです」と話し、カキ養殖部会会長の遠藤勝彦さんは、「旧知の間柄のように接してくださいます。いつも、何が必要ですかと心を寄せてくださり、ありがたく思いません」と感謝の言葉を伝えていました。



寄せ書きを贈る、大阪いずみ市民生協組合員。カキ処理場の完成で140人～150人の雇用の場ができたそうだ。

## ニュース 「土壌スクリーニング・プロジェクト」 ボランティアに新コース 福島県生協連



レクチャーを行なう、福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター 特任研究員の朴 相賢さん（左から2人目）。

るため、全国の生協にボランティアを呼び掛けていますが、これまでは、レクチャーと実測を含め、4日連続の参加が必須だったため、「より参加しやすいボランティアのコースをつくってほしい」との声が多数上がっていました。こうした声を受け、5月より、2日間の「ショートコース」、「リピーターコース」が新設されました。ショートコースに参加した、東京都生協連の荒井伸幸さんは、「ショートコースにも、福島県の農地の実態や課題を学ぶことができるレクチャーがあり、大変勉強になりました」と話します。

冬の間は、田んぼの測定が中心になわれていましたが、作付けの時期に入ったため、いったん田んぼの測定は終了し（県内の田んぼの35%が測定完了）、5月中旬からは果樹園を中心に進められています。



果樹園の放射性物質濃度測定の様子。

福島県生協連は、J・A新ふくしまや福島大学と共に、農地一枚ごとの放射性物質濃度を測定し、その結果を今後の生産計画に生かすための「土壌スクリーニングプロジェクト」を行なっています。5月27日には、このプロジェクトを含めた福島県生協連の取り組みに、消費者支援功労者表彰の最高賞である「内閣総理大臣表彰」が贈られました（詳細は31ページ）。「土壌スクリーニングプロジェクト」では、測定の可視化と、その速度を上げ

※ ボランティアの応募は、「土壌スクリーニングプロジェクト」ホームページにて。  
「土壌スクリーニング」、または「どじよすた〜」でインターネット検索を。

ニュース  
継続した  
復興支援活動を  
全国の生協で確認  
日本生協連

6月14日、ホテルイースト東京21にて、日本生協連第63回通常総会が開催されました。

総会では、特別課題の一つとして提案された東日本大震災支援、とりわけ福島に対する支援、エネルギー・原発問題の取り組みを含めたすべての議案が可決承認されました。

また、会場発言では、東日本大震災の復興支援活動に関する意見が多数出されました。岩手県生協連からは、



総会復興支援コーナーの様子。

三陸唯一の映画館「みやこシネマリー」を運営する、みやこ映画生協への募金の呼び掛けが、福島県生協連からは、「福島の子ども保養プロジェクト」、「土壌スクリーニングプロジェクト」、「食品放射線測定」の活動の報告がありました。また、いばらきコープから「福島の子ども保養プロジェクト」への継続した支援活動の決意表明や、コープおおいだから、震災直後から続いているコープふくしまとの交流支援活動についての報告がありました。

総会会場外では、「3年目の今、私たちにできること」をテーマに、この間の復興支援活動を紹介するブースが設置され、多くの総会参加者が展示に足を止めていました。

ブースに設置されていた、県別の復興支援活動を紹介するタペストリーや、「心に寄りそう場をつくる」、「買って支える」、「福島県産米全袋検査」について紹介するタペストリーは、貸し出し可能です。

お問い合わせは、

日本生協連会員支援本部出版部  
八幡、新井

(電話03-5778-8183)まで。

※ タペストリーのイメージ画像は、「情報プラザ」内「復興支援情報」に掲載しています。

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

みやぎ生協 生活文化部 須藤敏子

私は、震災直後から、地域の組合員活動のサポートを行ってまいりました。どこに行っても、生協への感謝の言葉を耳にします。店舗や宅配の職員、そして組合員ボランティアが頑張っていたんだなあ、全国の生協からたくさんの方が駆け付けて支援をしてくださったおかげだなあと強く思います。

震災から2年がたち、格差が出てきています。災害公営住宅<sup>※1</sup>も入居希望者が増えていて、住宅を再建したいと思っていた人たちも、いざその決断をせまられるときが来ると、進まない復興の現状に意向とは異なった決断をしなければならない状況です。

そんな方々に少しでもほっとできる時間をつくりたい、ということで、みやぎ生協では「ふれあい喫茶」を開催しておりますが、ここでは、同じ体験をみんなで共有することを大事にしています。「やれることリスト」を送ってくださった生協さんに、手芸品の材料と作り方が一緒になった「手作りキット」をお願いしましたが、みんなで同じ体験ができ、大変助かりました。

全国の生協の方々へ、お菓子を送っていただいたり、本当に

たくさんの方と旧知のお友達のようにお話をさせていただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。被災された方が「忘れないでほしい」とどんな気持ちで言っているかを考えながら、これからも活動していけたらと思います。

追伸：

公益財団法人プラン・ジャパン<sup>※2</sup>、ケア宮城<sup>※3</sup>が発行している「被災者の心を支えるために 地域で支援活動をする人の心得」は、非常に良い内容です。HPからダウンロードもできますが、ぜひ、取り寄せて、皆さんで読んでいただけたらと思います。

お問い合わせ先

公益財団法人プラン・ジャパン コミュニケーション部  
(03-5481-0030、E-mail: library@plan-japan.org)  
無償で提供していただけます(数百部単位での提供も可)。

- ※1 家を失った被災者に、自治体が賃貸で提供する住宅のこと。
- ※2 アジアやアフリカ、中南米の開発途上国の「自立」を目指し、現地の子どもたちと共に地域開発を行なっている国際NGO団体。
- ※3 宮城県内の子どもたちの心のケアにあたる人を支援することを目的に、2011年4月に活動を開始した団体。

メッセージ全文は、日本生協連「復興支援ポータルサイト」内、「つながろうCO-OPアクション情報」バナーをクリックし、ご覧いただけます。「日本生協連 復興支援ポータルサイト」でインターネット検索を。





田老漁港のすぐそばに建てられた田老町漁協の仮工場では塩蔵ワカメの包装が進む。

## リサーチ「被災地のいま」

### 生産現場～岩手県沿岸部

岩手県沿岸部。水産業も水産加工業も施設面の再建を進め、震災前の取引へ戻す努力をしています。ワカメ養殖施設を復旧し奮闘を続ける田老町漁協<sup>※1</sup>、その養殖ワカメを加工する古須賀商店<sup>※2</sup>、工場を新設し、酒づくりを再開した大槌町の赤武酒造<sup>※3</sup>を取材しました。

### 施設の再建は進むが……

岩手県の太平洋沿岸、宮古市では古くから水産業と水産加工業が発達していました。

市街地から北へ約15kmの田老地区では、巨大な防潮堤の海側にいくつものプレハブ施設が立ち並びます。防潮堤を乗り越えてやって来た津波は町に大きな被害をもたらしましたが、その直後から地元の田老町漁協は水



盛岡市内で事業を再開させた赤武酒造の古館秀峰社長。  
(写真提供:赤武酒造)



同じく田老漁港すぐそばに建設された昆布の乾燥施設。



田老町漁協の養殖ワカメを原料に、加工品の製造を進める古須賀商店。

産業の立て直しを図り、11年秋には439台のワカメの養殖施設が完成。陸上の加工施設の建設も進め、12年春には震災発生前の7割まで養殖ワカメの収穫を復活させました。

誰もが待ち望んでいた養殖ワカメ、地元の水産加工業者も同様です。その一つ、宮古市の古須賀商店では11年は天然ワカメで何とか「茎わかめ生姜漬け」を作りましたが、12年からは、震災前と同様、養殖ワカメで商品の生産を再開することができ、胸をなでおろしています。

しかし、課題は山積んでいます。施設の再建はできても、田老町漁協も古須賀商店も取引先は以前に比べて大きく減ったままです。生産できなかった1年のブランクはあまりに大きかったです。

### 時間がかかる町の復興

大きな被害を受けた田老地区や宮古港近くの銚ヶ崎地区<sup>くわがさき</sup>では、町そのものの復興計画ができたばかりで、これから長い時間をかけて区画整理を進めなければなりません。建設資材の不足も予想されています。

困難の中、多くの事業者が自力で立ち上がってきました。宮古市の南、大槌町で酒蔵を営んでいた赤武酒造もその一つです。他の酒蔵から蔵を借りて日本酒を造るという異例の方法で清酒「浜娘」を復活させた一方、2年の歳月をかけて盛岡市内に酒蔵と工場の建設を進め、この6月に生産をスタートしました。経済産業省からの補助金だけでは足りず資金調達に駆け回り、ただでさえ大変な中、返済の重圧も加わりました。それでも、いつの日か大槌町へ帰る日を願って、お酒を造り続けます。

(文・写真 山本明文)

- ※1 いわて生協が1975年から供給してきた産直の「真崎わかめ」の産地。12年3月に供給が再開された。
- ※2 産直「真崎わかめ」の中芯を使った、いわて生協PB商品「アイコープ産直真崎わかめ味付茎わかめ」などを製造している。
- ※3 生協とは古くからの付き合いがあり、東北地方の生協で取り扱う「CO・OP虹の宴」を製造していた。被災後に他社の蔵を借りて製造した「浜娘」は、いわて生協・東北サンネット事業連合・コープネット事業連合等で供給された。